中学校における「通級による指導」の取組について

太子町立太子東中学校
教諭　　寺 内　和 恵

１　取組の内容・方法

太子町には小学校４校、中学校２校があり、学校生活支援教員が３名配置されています。太子東中学校は、平成 24 年度から支援拠点校となりました。私は学校生活支援教員になり６年になります。平成 29 年度は、自校通級９名，巡回指導７名の計 16 名を対象に自立活動を中心とした指導を行っています。中学校での指導を切れ目なく円滑に進めるために、校種間の移行期の支援について特徴的な取組を行いました。

(1)　中学校入学当初の円滑な支援の導入

太子町では、小学校から引き続き中学校でも通級による指導を希望する生徒がいます。しかし、児童や保護者の中には中学校の通級による指導に不安をもつ場合も少なくありません。

そこで、入学前の２学期に、対象の児童と保護者に中学校の通級による指導の様子を見学してもらう機会を持ちます。また、３学期には中学校の担当教員が小学校の指導を参観します。その際、自己紹介をしたり、部活動や教科担当の先生が変わること等、小学校と中学校での生活の違いについて話をしたり、本人が不安に思っていることや得意なこと、苦手なこと等を聞き取ったりします。その後には、児童が使用している教材やワークシート類、指導の記録を基に、指導内容を小学校と中学校で共有します。

(2)　高等学校での継続した支援に向けて

太子東中学校では、平成 28 年度から、播磨西地区サポートネット会議で提案された「中学校から高等学校へ引き継ぐためのガイドライン」,「特別支援教育にかかる中学校・高等学校連携シート」等を活用して、合格発表直後に支援の引継ぎを行っています。その成果もあって対象生徒は入学後スムーズに学校生活を送っています。

高等学校への引継ぎを行ったＡさんの保護者からは、「資料を引き継いでもらったので、高等学校では早速に面談していただき、子どものことについて相談することができました。今では休まず登校しています。」と言われ、私自身も高等学校へ引き継ぐことの大切さと責任を強く感じました。

引継ぎを受けた高等学校では、クラス分けや選択科目の決定時にＡさんに応じた配慮が行われました。また、早い段階から保護者と連絡を取ることができ、学年はじめの宿泊合宿にもスムーズに参加できました。

特別支援教育にかかる
中学校・高等学校連携シート（記入例）

作成日	平成　年　月　日
中学校名	△△市立○○中学校
記入者職名	教諭　○○○○

名（なまえ）前	○ ○ ○ ○	性別	男	生年月日	平成12・12・12
住　所	△△市○○町1－2－3			連絡先	○○○-○○○-○○○○

本人の状況	性格・行動の特徴	☐緊張しやすい　☐口数が少ない　☐感覚過敏がある ☐幼い面がある　☐ストレスに対して逃避的である　☐性格が穏やか ☐不快な感情を表現することが苦手　☑落ち着きがない　☑集団での遊びを好まない ☑感情のコントロールが難しい　☑人の気持ちを理解することが苦手　☑新しい環境が苦手
	その他	自分が納得がいくまで質問を続ける。授業中などに本人が納得せずに質問を続けるときは、授業後に個別に受け付けることを伝える。納得ができれば、次の行動に移ることができる。
	学校生活の様子	**（授業態度、提出物、休み時間の様子など）** 上の空で授業に集中できないことがある。好きな教科（理科、社会）では積極的で自分から質問をする。メモを取るように指導すると、提出物はきちんと出せる。家庭では提出物の完成に時間がかかっている。 **（部活動・委員会・係・当番活動の様子、学校行事等への参加状況など）** 陸上競技部（長距離）、市総合体育大会オープン1500m第3位。 清掃や係活動は、明確な仕事の指示が必要。何をするのかが分からないと動きづらい。全体での行事（体育祭、文化祭など）では、参加への配慮が必要。 **（出欠状況及び特記すべきこと）** ☐ 通常の登校　☐ 別室登校　☑ その他（　一時的に保健室登校　） （具体的な状況） 中学校1年生の1学期後半から登校しぶりがあり、保健室の個別指導を経て、2年生からは通常の登校となる。
	得意なことや苦手なこと	**（得意なこと、興味あること…作業、行動、教科など）** 体を動かすことは得意。体育などでは見本となることもある。 **（苦手なこと…作業、行動、教科など）** 待つこと。見通しが持てないと落ち着きをなくすので、スケジュール等簡単な見通しを口頭でもよいので、伝えておく必要がある。
	自分の特性理解の程度	よく理解できている・ある程度理解できている・あまり理解できていない、　理解できていない （具体的な状況）特性について具体的に本人と話し合ったことはないが、配慮されていることは理解している。
中学校での支援の方針や内容及び結果の評価	学習への支援	**（別室指導の有無、通常授業内での個別支援、授業外での個別支援の内容や頻度　定期考査での配慮事項など）** 新しいパターンの授業が始まる時には、丁寧に説明し見通しを持たせることが必要。個別に説明することで理解が進む。 **（定期考査での配慮事項）** あり・なし 具体的な配慮：時間の見通しが持てないと時間内に回答を終えることが難しいので、テスト用紙に1問10分など所要時間の目安を鉛筆で記入しておく。
	日常生活での支援（医療、福祉サービスを含む。）	**（身辺自立の程度、身体面や心理面での支援など）** スクールカウンセラーによるカウンセリングを定期的に受けている。（月1回）
	友達・コミュニケーション等の支援	**（コミュニケーションや集団内での社会性を育むために、発達上必要とされる支援など）** 2～3人の小集団で設定されたやりとりや話し合い活動であれば、自分の思い違いがあっても修正しながらコミュニケーションがとれる。休み時間など自由な時間で、友だちのことばを思い違いして、トラブルに発展したことがあるので、その都度友だちのことばの真意等を教師が丁寧に伝え直すことが必要。頼りになるキーパーソンの教師がいることが重要。
その他	**（診断名や心理検査（検査名、検査日、検査機関、検査結果）等）** アスペルガー症候群＋注意欠陥・多動性障害（おひさまにこにこクリニック平成25年10月3日診断）。WISC-Ⅳ FSIQ95（おひさまにこにこクリニック平成25年8月10日検査）。	

私は、上記の内容を確認し、進学する高等学校へ情報提供することについて同意しました。

平成　年　月　日

保護者名	○ ○ ○ ○　　印

＊ 自署又は記名押印

中学校・高等学校連携シートってなに？

中学校・高等学校連携シートは、中学校での生活の様子や、学習の状況などを１枚にまとめたものです。発達の特性などにより学校生活や学習に困難を抱えているお子さんのために作成します。このシートを使って、進学する高等学校へお子さんの中学校での様子を引き継ぎます。

お子さんが高等学校で一貫した支援が受けられるように高等学校の先生に適切に理解してもらうために役立てていきます。

１　毎日の学校生活が送りやすくなります

お子さんに対する共通理解が進むことで、お子さんが毎日の学校生活を送りやすくするのに役立ちます。また、必要な支援が途切れることなく引き継がれていくことにも役立ちます。

２　保護者の負担が減ります

高等学校に入学すると、保護者も新しい先生と連携をとっていくことになります。このシートを引き継ぎに活用することで、基本的な情報のやり取りがスムーズになります。

※　合格発表後引き継ぐため、合否判定には一切影響を与えません

裏面をご覧下さい！！

入試のまえに
- シートの案内と作成
- 記入内容の同意

進路が決まったら
- 記入内容の確認
- 引き継ぎ

入学してから
- 情報共有
- フォロー

［送り手の学校］
○太子町立中学校

［受け手の学校］
○ 兵庫県立高等学校
第4学区内の高等学校

［問い合わせ先］
① 在籍している中学校（高等学校入学以前）
進学先の高等学校（高等学校入学後）
② お住まいの市教育委員会
太子町教育委員会管理課　揖保郡太子町鳩2

西はり太郎さんの引き継ぎ（例）

２　取組の成果

(1)　中学校入学当初の円滑な支援の導入の成果として、中学校入学後に以前会った先生がいるという安心感が得られることと入学後の早い時期から引き継いだ視覚的な支援やソーシャルスキルやコミュニケーションスキル等の指導を進めることができました。

(2)　高等学校での継続した支援につなげた成果として、対象生徒は高等学校入学後スムーズに学校生活を送ることができています。高等学校の特別支援教育コーディネーターの先生や学年の先生方と本人・保護者が常に相談できる環境にあります。
　平成 30 年度から高等学校でも通級指導が開始されます。本人・保護者の期待も高まっています。小学校や中学校で丁寧に行ってきた通級による指導や本人・保護者の思いに寄り添う指導が継続されることに期待が膨らみます。

３　課題及び今後の取組の方向

(1) 早期支援の必要性
①幼稚園，こども園から小学校への引継ぎを行うことにより、保護者の理解を進める。
②一枚で簡単に情報提供を行うことができる「中高連携シート」のように、小学校でも「小中連携シート」のようなものがあれば、保護者の引継ぐための意識的レベルのハードルが下がると考えられる。

(2)中高連携のためには、小中連携は欠かせない。
①小中の特別支援教育コーディネーターとの連携
②中高の特別支援教育コーディネーターとの連携
③教職員の特別支援教育への理解と支援の実践への具現化
④授業のユニバーサルデザイン化

(3)支援のつながりが子どもの自立と成長につながる。
①医療，福祉，保健等の関係機関との連携
②スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携

(4)本人・保護者に寄り添った支援
①環境を整える。「心のバリアフリー」（障害者理解）を学校全体としての理解と啓発が大切である。
②学びの場の連携と連続。通級の成果を通常学級で生かす。情報の共有とつなぎ。
③可能な限りその意向の尊重。

　学校生活支援教員や特別支援教育コーディネーターは、本人・保護者の気持ちに共感し、寄り添う支援を行い、共に歩む熱意が信頼を生むことになり、よき相談者であることが大切です。周りに理解してくれる人が増えれば、子どもも保護者も勇気がもらえ、次へのステップとなります。
　今後の方向性として、特別支援教育を進めていくにあたり、「人の育成」・「理解者」・「実践者」を増やすことが大切です。学校生活支援教員や特別支援教育コーディネーターは、その中心的役割を担うが、そのポジションの人だけではなく、教職員全体で実践していき、社会全体で意識して実践していくことが、子どもの自立と成長につながります。